

大学生における援助要請意図

—— 主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因 ——

永 井 智*

本研究の目的は、援助要請に関連する主要な要因である、ソーシャルネットワーク、パーソナリティ、問題の深刻さ、デモグラフィック要因と大学生における援助要請意図との関連を検討することである。大学生 596 名に対し、家族サポート、友人サポート、自尊感情、自尊感情の脆弱性、悩み、抑うつ、デモグラフィック要因および家族、友人、専門家それぞれに対する援助要請意図について尋ねる質問紙を実施した。共分散構造分析の結果、家族と友人への援助要請意図に対しては悩み、抑うつ、ソーシャルサポートが影響していたが、専門家への援助要請意図に対しては悩み、自尊感情、友人サポートが影響していた。

キーワード：援助要請、ソーシャルサポート、自尊感情、抑うつ、被援助志向性

問題と目的

個人が問題を抱え、それを自身の力では解決できない場合に、必要に応じて他者に援助を求めることは、重要な対処方略の一つである。こうした現象は近年、臨床心理学の分野において、援助要請や被援助志向性という視点から捉えられてきた。

援助要請の生起に影響する要因は様々あるが、専門家への援助要請など、特殊な対象への援助要請に特有の要因を除けば、大きく「ネットワーク変数」「パーソナリティ変数」「個人の問題の深刻さ、症状」「デモグラフィック要因」という 4 つの領域に分類される (水野・石隈, 1999; Rothi & Leavey, 2006)。しかし、先行研究の多さにもかかわらず、各要因と援助要請との関連には一貫しない結果も多く、その知見は十分に統合された理論には至っていないことが指摘されている (Rickwood, Deane, Wilson, & Ciarrochi, 2005)。そこで本研究では、上記の 4 領域における主要な概念に注目し、先行研究の問題点を明らかにした上で、各要因と援助要請との関連を明らかにするための検討を行う。

ネットワーク変数

潜在的な援助者の有無は、援助要請の意思決定に影響するとされる (高木, 1997)。そのため、援助要請の検討においては各人の持つ援助資源の量を考慮する必要がある。多くの研究では、ネットワーク変数としてソーシャルサポートが用いられており、本研究でも、ソ

シャルサポートの測定は必要であると考えられる。

先行研究では、専門家に対して援助要請をした者は、しなかった者よりも、援助要請可能な資源が少ないことが報告されている (Bosmajian & Mattson, 1980)。このことは、インフォーマルなサポート資源の不足によって、単純に援助要請先として専門家を選択せざるをえない、あるいは問題が悪化し、結果的に専門的な援助の必要性が高まるためと考えられている (Cramer, 1999)。

ただし、先行研究では、ソーシャルネットワークのサイズや全般的なソーシャルサポートなど、大きな単一の変数がネットワーク変数として扱われており、その所在が家族なのか友人なのかといった区別はされないものが多かった (e.g., Sheffield, Fiorenza, & Sofronoff, 2004)。しかし、ネットワークとされるものがサポート資源として扱われるのなら、例えば家族サポートは家族への援助要請に対して、より影響を与え、友人サポートは友人への援助要請に対して、より影響を与える可能性が考えられる。そのため、サポートの総量だけでなくその所在についても同様に考慮し、測定を行う必要があると考えられる。

パーソナリティ変数

パーソナリティ変数において、しばしば扱われるのは自尊感情である。援助を受けることは、自尊感情への脅威をもたらす (Fisher, Nadler, & Whitcher-Alanga, 1982; Nadler & Fisher, 1986)、それが援助要請を抑制すると考えられてきたためである。社会心理学においては、被援助時の心理的影響についての諸理論を統合する形で、自尊感情を軸とした自尊心脅威モデルが提唱

* 立正大学心理学部
〒141-8602 品川区大崎 4-2-16
nagai-st@ris.ac.jp

されている (Fisher et al., 1982)。そのため自尊感情は、援助要請を論じる上でも重要なパーソナリティ変数であるといえる。

しかし、自尊感情と援助要請との関連については、相反する2つの可能性が従来から議論され続けている。すなわち、自尊感情の高い者は、援助要請による自尊感情の低下を恐れるために援助要請を行わないという認知的一貫性仮説 (Bramel, 1968) と、自尊感情の低い者は、わずかな自尊感情がさらに低下することを恐れるために援助要請を行わないという傷つきやすさ仮説 (Tessler & Schwartz, 1972) である。わが国の研究では、援助要請と自尊感情の間に正の関連を報告するものが比較的多い (e.g., 木村・水野, 2004)。しかしながら、いずれの研究も関連は非常に弱く、関連が示されなかった研究 (水野・石隈・田村, 2006) も存在する。

ではなぜ、自尊感情と援助要請の間には一貫した結果が得られないのであろうか。この理由の一つに、自尊感情の捉え方の問題があると考えられる。上に挙げた2つの仮説の相違点は、高自尊感情者、低自尊感情者のいずれにおいて、自尊感情への脅威がより高いかという点である。つまりいずれの仮説も、自尊感情への脅威が援助要請を抑制するという前提においては一致している。そう考えるならば、援助要請との関連をまず検討すべきなのは、自尊感情そのものではなく、前提となる自尊感情に対する脅威であると考えられる。

近年、自尊感情を安定した特性的概念ではなく、状況によって変動するものとして捉える試みがなされている (e.g., Crocker & Knight, 2005 ; Kernis, Grannemann, & Barclay, 1989)。すなわち、James (1892 今田訳 1992) が“自尊感情=成功/願望”と表現したように、成功などのポジティブな出来事は自尊感情を高揚させ、失敗などのネガティブな出来事は自尊感情を低下させると考えられている。こうした自尊感情の変動性には個人差が存在し、その測定にはいくつかの方法が存在する (e.g., Crocker, Luhtanen, Cooper, & Bouvrette, 2003 ; Kernis et al., 1989)。その中で Crocker et al. (2003) は、外的出来事によって、自己価値の感覚が影響を受ける傾向を、質問紙によって測定するという方法を用いている。この方法は、援助要請という出来事による自尊感情の脅かされやすさの検討にも適していると考えられ、自尊感情の視点から援助要請を扱う場合、まずはこうした変数を用いて検討を行う必要があると考えられる。

個人の問題の深刻さ、症状

深刻な問題の存在は援助ニーズを高めるため、基本的に援助要請を促進するとされる (e.g., Goodman,

Sewell, & Jampol, 1984 ; Komiya, Good, & Sherrod, 2000 ; Vogel & Wei, 2005)。そのため、個人の抱える問題は、ソーシャルサポートと同様、援助要請を検討する上で考慮すべき変数であると考えられる。わが国でも、個人の抱える悩みは、ほぼ一貫して援助要請に対して正の影響を示すことが報告されている (e.g., 木村・水野, 2004 ; 永井・新井, 2007)。

しかし一方で、抑うつや、それに続く自殺企図といった問題は、無気力や問題対処意思の低下を伴うため、悩みなどとは逆に、援助要請を低下させる可能性が指摘されている (Garland & Zigler, 1994)。しかしながら実際の研究においては、抑うつによる援助要請の低下を支持する結果 (e.g., Deane, Wilson, & Ciarrochi, 2001 ; Garland & Zigler, 1994) と支持しない結果 (e.g., Halgin, Weaver, Edell, & Spencer, 1987 ; Kelly & Achter, 1995) とが、ともに見られる。つまり、一言で「個人の問題の深刻さ、症状」と言っても、その種類によって、予測される援助要請との関連は異なり、しかも得られる結果は一致していない。

こうした不一致の原因として、抑うつと悩みとの間の正の関連の存在 (伊藤, 1993) が考えられる。すなわち、従来の研究のように、抑うつと悩みの一方のみを扱うと、もう一方の要因の影響が混入し、援助要請への影響が相殺される可能性がある。従って、個人の問題の深刻さ、症状と援助要請との関連を明確にするためには、抑うつと悩みの両方を扱い、両者の関連を統制した上で、検討を行う必要があると考えられる。

デモグラフィック要因

デモグラフィック要因の中で、援助要請との関連が頻繁に検討される変数は性別である。海外の研究のほとんどは、男性よりも女性の方が、心理的問題の援助要請が高いことを報告している (水野・石隈, 1999)。このような性差は、援助要請が伝統的な男性役割に反するためであると解釈されており (Addis & Mahalik, 2003)、実際の実証研究では、男性における性役割葛藤が、援助要請への態度と負の関連を示すことが一貫して報告されている (Good, Dell, & Mintz, 1989 ; Simonsen, Blazina, & Watkins, 2000)。しかしながら、例えば Mahalik, Good, & Englar-Carlson (2003) が例として挙げる「同性愛恐怖症」「プレイボーイ」といった極端な性役割が、日本にもそのまま当てはまるとは考えにくい。そのためわが国でも、同様に性差の検討を行う必要があると考えられる。

各領域間の階層関係に関する問題

ここまで、各領域における主要な要因と、援助要請

との関連についての問題を述べた。しかしながら、援助要請と各要因との関連を検討する場合、4つの領域間の階層関係についても考慮する必要がある。

例えば、ソーシャルサポートの存在は、自尊感情の高さ (Hoffman, Ushpiz, & Levy-Shiff, 1988; Sun & Hui, 2007), 抑うつの低さ (Galambos, Leadbeater, & Barker, 2004; Lewinsohn, Roberts, Seeley, Rohde, Gotlib, & Hops, 1994) につながり、逆に自尊感情の低さは抑うつにつながる事が報告されている (Lewinsohn, Hoberman, & Rosenbaum, 1988; Sun & Hui, 2007)。こうした知見からは、ソーシャルサポートが自尊感情を媒介し、問題、症状につながるというプロセス (e.g., Krause, 1987) を考えることができる。また、悩みは抑うつを含む様々な精神的健康に影響する (平井, 2001; 伊藤, 1993) ため、問題、症状という段階の内部においても、悩みから抑うつに対する影響が考えられる。さらに、青年期以降は、援助要請だけでなくソーシャルサポート (嶋, 1992), 自尊感情 (東・岩崎・小林, 2001), 抑うつ (Nolen-Hoeksema, 1990), 悩み (平井, 2001) などにも同様に性差が報告されている。そのため上記の各変数は、デモグラフィック要因である性別から影響を受ける可能性が考えられる。以上をまとめると、まず性別が外生変数として存在し、次の段階として2つのサポートが、続く自尊感情と自尊感情の脆弱性に影響を与え、それらが悩み、そして抑うつへと影響を与えるという5段階の階層関係が想定でき、最後に、それらの変数全てが援助要請意図に対して影響を与えるモデルを考えることができる。

このようなモデルが仮定されるならば、これまで挙げた諸要因は、援助要請に対して直接影響を示すだけでなく、別の要因によって影響が媒介される部分も存在する可能性が考えられる。例えば、アメリカの大学生における専門家への援助要請研究では、「個人の問題の深刻さ、症状」である心的苦痛を統制すると、性別が援助要請に影響を示さなくなることが報告されている (Vogel & Wester, 2003; Vogel, Wester, Wei, & Boysen, 2005)。このように、援助要請への影響要因を明確にするためには、単に援助要請と各要因との関連を個別に検討するだけでなく、要因間の階層関係も考慮した上で検討を行う必要がある。

本研究の目的

援助要請研究の発展には、まずこれまでに挙げた点を考慮しながら、知見の整理を行う必要があると考えられる。そこで本研究では、援助要請に関連する4領域からソーシャルサポート、自尊感情、自尊感情の脆弱性、抑うつ、悩み、性別を取り上げ、これらの階層

関係を考慮しながら、親、友人、専門家への援助要請意図との関連を検討することを目的とする。

具体的には、各要因と援助要請との関連を個別に検討し、次に、前節で述べたモデルを共分散構造分析によって検討する。共分散構造分析を行った場合、これまでの議論を踏まえるならば、各変数から援助要請に対して以下のような直接の影響が示されると考えられる。すなわち、(仮説1) 家族サポートは家族への援助要請行動に正の影響を与え、専門家への援助要請意図に負の影響を与える、(仮説2) 友人サポートは友人への援助要請意図に正の影響を与え、専門家への援助要請意図に負の影響を与える、(仮説3) 自尊感情の脆弱性は各援助要請意図に対して負の影響を与える、(仮説4) 自尊感情は各援助要請意図に対して影響を示さない、(仮説5) 抑うつは各援助要請意図に対して負の影響を与える、(仮説6) 悩みは各援助要請意図に対して正の影響を与える、という6つの仮説が考えられる。

方 法

調査手続きと調査対象

調査は、2007年5～7月に関東地方および中部地方の4年制大学4校における大学生計644名を対象に実施された。質問紙のフェイスシートには、匿名性が保証されること、回答が任意であり、協力しないことによる不利益は一切ないことが明記された。調査対象者のうち、調査への協力意思を示さなかったのは22名であった。また、回収された質問紙のうち、26名分は記入に不備があったため除外した。そのため、計596名 (男性214名、女性382名) 分のデータを分析の対象とした。また、分析対象となった調査協力者の年齢は平均が19.55、標準偏差が1.67であった。

質問紙の構成

1. 援助要請意図 援助要請意図の測定には、木村・水野 (2004) が大学生における被援助志向性の研究で用いた項目を用いた。これは、大学生活における主要な6つの悩みを提示し、もしこのことで悩み、一人で解決できないとしたら、誰かに相談すると思うかを尋ねるものである。具体的には、「対人関係」「恋愛・異性」「性格外見」「健康」「卒業後の進路や将来のこと」「学力・能力」という6つの悩みを提示し、それぞれについて、家族、友人、学生相談やカウンセラーなどの専門家それぞれにどれ位相談すると思うか尋ね、「1: 相談しないと思う」～「5: 相談すると思う」の5件法で回答を求めた。

2. ソーシャルサポート 大学生用ソーシャルサ

ポート尺度 (嶋, 1992) を用いた。「おしゃべりなどを
して楽しい時を過ごす」「お互いの気持ちや感情を分か
り合える」など 12 項目を用い、家族と友人それぞれにつ
いて、どれくらい当てはまるかを、「1：全くない」
～「5：非常によくある」の 5 件法で尋ねた。

3. 自尊感情の脆弱性 Crocker et al., (2003) の
Contingencies of Self-Esteem Scale を元に、松田
(2006) が作成した自尊感情の脆弱性尺度を用いた。「他
の人が私のことを悪く思っていることがわかれば、自
分はダメな人間だなと感じる」「他の人に何かで負ける
と、自分は何をやってもダメな人間だなと感じる」な
ど、全 16 項目を用い、「1：全く当てはまらない」
～「7：非常によく当てはまる」の 7 件法で回答を求め
た。

4. 自尊感情 Rosenberg (1965) による自尊感情尺
度の邦訳版 (山本・松井・山成, 1982) を用いた。「少な
くとも人並みには価値のある人間である」「色々な良い素
質を持っている」など、全 10 項目を用い、「1：当て
はまらない」～「5：当てはまる」の 5 件法で回答を求
めた。

5. 抑うつ Radloff (1977) による Center for Epide
miological Studies Depression Scale (CES-D) の邦訳
版 (島・鹿野・北村・浅井, 1985) を用いた。これは疫学研
究のために開発された尺度であり、「普段はなんでもな
いことがわずらわしい」「食べたくない。食欲が落ちた」
など 20 項目で構成される。被調査者には、各項目それ
ぞれの 1 週間に経験した頻度を尋ね、4 件法「ない (0
点)」「1～2 日 (1 点)」「3～4 日 (2 点)」「5 日以上 (3
点)」で回答を求めた。

6. 悩み 援助要請意図の測定の際に提示した 6 つ
の悩みについて、「過去 1 年の間にこのことで悩んだこ
とがありますか」と尋ね、「1：悩んだことがない」

～「5：悩んだことがある」の 5 件法で回答を求めた。

結 果

各尺度の基礎的分析

まず各尺度に対し主成分分析を行った結果、各尺度
における第 1 主成分の寄与率は 42.53～51.20%であっ
た。また、各尺度のうち、自尊感情尺度の第 8 項目「も
っと自分自身を尊敬できるようになりたい」のみ、負荷
量が.03 と極端に低い値を示したが、残る項目の負荷量
は.43～.83 であった。そこで、自尊感情を除く各尺度に
ついては、項目への回答の合計を尺度得点とし、自尊
感情尺度については、第 8 項目を除いた 9 項目の回答
の合計を自尊感情得点とした。各尺度の α 係数は、家
族への援助要請意図が.81、友人への援助要請意図が
.83、専門家への援助要請意図が.82、家族サポートが
.92、友人サポートが.92、自尊感情の脆弱性が.92、自尊
感情が.85、抑うつが.88、悩みが.92 であった。

各変数間の基本的な関連

まず、各得点の性差を検討するため、 t 検定を行っ
た (Table 1)。その結果、専門家への援助要請意図およ
び友人サポートのみ性差は見られなかった。一方、自
尊感情のみ男性の方が得点が高く ($p < .01$)、残る得点は
全て女性の方が得点が高かった (全て $p < .01$)。

次に、各変数間の相関係数を算出した (Table 2)。そ
の際、性別には男性を 0、女性を 1 とした性別のダミー
変数を用いた。その結果、性別は各変数との間に、 t
検定と同様の関連を示した。また、家族サポートと友
人サポートはともに、家族および友人への援助要請と
の間に正の相関を示した。さらに、自尊感情の脆弱性
は友人への援助要請との間にのみ正の相関を、自尊感
情は家族と専門家への援助要請との間に正の相関を示
した。また、抑うつは家族と友人への援助要請との間

Table 1 各変数の記述統計と t 検定の結果

	男性 $n=214$		女性 $n=382$		t 値	得点範囲
	Mean	SD	Mean	SD		
家族への相談意図	16.49	(5.98)	19.30	(6.06)	5.46**	6～30
友人への相談意図	19.81	(6.29)	21.12	(5.52)	2.53*	6～30
専門家への相談意図	11.41	(5.38)	10.72	(5.04)	1.57	6～30
家族サポート	38.67	(10.82)	42.96	(9.73)	4.95**	12～60
友人サポート	47.18	(8.75)	47.77	(8.29)	0.83	12～60
自尊感情の脆弱性	48.98	(15.37)	56.27	(13.63)	5.78**	16～112
自尊感情	27.30	(7.57)	24.89	(7.29)	3.83**	9～45
抑うつ	17.39	(10.07)	20.07	(10.52)	3.03**	0～60
悩み	22.56	(5.39)	24.48	(4.06)	4.55**	6～30

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 2 各変数間の相関係数

	援助要請意図			家族 サポート	友人 サポート	自尊感情の 脆弱性	自尊感情	抑うつ	悩み	性別
	家族	友人	専門家							
家族への援助要請意図		.53**	.31**	.57**	.22**	.02	.15**	-.19**	.22**	.11**
友人への援助要請意図			.15**	.23**	.43**	.10*	.04	-.08*	.35**	.22**
専門家への援助要請意図				.08	-.03	-.04	.13**	-.03	.13**	-.06
家族サポート					.36**	-.05	.23**	-.19**	.06	.20**
友人サポート						-.07	.24**	-.22**	.07	.03
自尊感情の脆弱性							-.57**	.46**	.43**	.24**
自尊感情								-.59**	-.34**	-.13**
抑うつ									.37**	.12**
悩み										.20**

n=596

* $p < .05$, ** $p < .01$

性別は、男性=0, 女性=1のダミー変数である

にのみ負の相関を示したのに対し、悩みは全ての援助要請との間に正の相関を示した。

共分散構造分析によるモデルの検討

最後に、各要因の階層関係を考慮した上で、それぞれの援助要請意図に対する影響を検討するため、共分散構造分析によるモデルの検討を行った。モデルではまず、ダミー変数である性別を、外生変数として設定した。続いて、家族サポートと友人サポートを、次に自尊感情の脆弱性と自尊感情を設定し、そして悩み、それに続いて抑うつを設定し、最後に従属変数として各対象に対する援助要請意図を設定した。性別を除く

変数は全て、尺度得点を観測変数として用いた。

また先行研究では、家族サポートと友人サポートの間(嶋, 1992), 自尊感情と自尊感情との脆弱性の間(松田, 2006)に関連が報告されている。さらに、ある対象に援助を求める者は、別の対象に対しても援助を求めやすいことが明らかになっている(Schonert-Reich & Muller, 1996)。以上の傾向は、本研究の単相関の分析においても見られたことから、家族サポートの誤差変数と友人サポートの誤差変数の間、自尊感情の誤差変数と自尊感情の脆弱性の誤差変数の間、各対象に対する援助要請意図の誤差変数の間に相関を設定した。

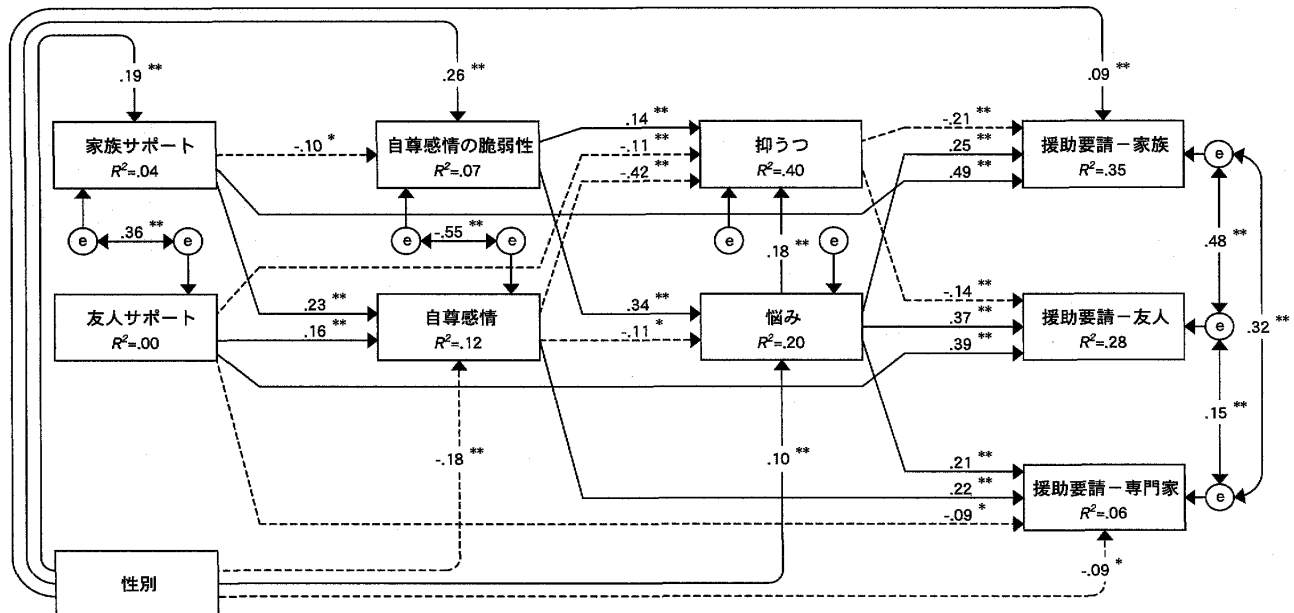


Figure 1 共分散構造分析の結果

* $p < .05$, ** $p < .01$

誤差分散の値については省略した

性別は、男性=0, 女性=1のダミー変数である

パスに示された値は全て標準化パス係数である

以上のモデルに対し、共分散構造分析を行った。有意でないパスを削除しながら分析を繰り返した結果、最終的に Figure 1 のようなモデルが得られた。モデルの適合度は $\chi^2=28.555$ ($p<.01$), $df=16$, $GFI=.991$, $AGFI=.968$, $RMSEA=.036$ であり、このモデルは、適合したモデルであると考えられる。

まず、家族サポートと友人サポートはともに、自尊感情に対して正の影響を与えていた。また家族サポートは、自尊感情の脆弱性に対しても負の影響を与えており、一方で友人サポートは抑うつに負の影響を与えていた。自尊感情の脆弱性は抑うつと悩みそれぞれに対して正の影響を与えており、一方で自尊感情は抑うつと悩みそれぞれに対して負の影響を示した。さらに、悩みは抑うつに対して正の影響を与えていた。性別は、家族サポート、自尊感情の脆弱性、悩みに対し正の、自尊感情に対して負の影響を与えていた。

各変数と援助要請意図との関連では、まず性別からは、家族への援助要請意図に対して正の、専門家への援助要請意図に対して負の影響が示された。家族サポートは家族への援助要請意図に対してのみ、一方の友人サポートは友人への援助要請意図に対してのみ正の影響を与えていた。ただし、友人サポートは専門家への援助要請意図に対して負の影響を示した。また、自尊感情は専門家への援助要請意図に対してのみ正の影響を与えていたが、自尊感情の脆弱性はいずれの援助要請意図に対しても影響を示さなかった。そして、抑うつは家族への援助要請意図および友人への援助要請意図に対して負の影響を与えており、悩みは全ての援助要請意図に対して正の影響を与えていた。なお、家族、友人、専門家の各援助要請意図における R^2 の値は、それぞれ.35, .28, .06 であった。

考 察

共分散構造分析の結果、ソーシャルサポートの自尊

感情に対する正の影響 (Hoffman et al., 1988), 自尊感情の抑うつに対する負の影響 (Lewinsohn et al., 1988), 悩みの抑うつに対する正の影響 (平井, 2001) など、先行研究と一致する結果が示された。性別の影響も同様に、家族サポート (嶋, 1992), 自尊感情 (東他, 2001), 悩み (平井, 2001) に対して、従来の知見と一致する結果が示された。一方、抑うつと性別との関連は、相関分析では有意であったものの、共分散構造分析では直接の関連が見られなかった。しかしこれは、先行する自尊感情やソーシャルサポートによって、性別の影響が媒介されたためと考えられ、やはり先行研究の知見 (e.g., Allgood-Merten, Lewinsohn, & Hops, 1990) と一致するものである。

この抑うつと性別との関連同様、援助要請意図と各要因との関連においても、 t 検定や単相関を用いて各要因と援助要請意図との関連を個々に検討した場合と、各変数間の階層関係を考慮した共分散構造分析の結果とでは、いくつかの点において異なる結果が示された。本研究ではこのような点を踏まえ、各変数が援助要請に与える直接の影響について仮説を検討した。本研究で設定された仮説と、その検討結果とをまとめると Table 3 のようになる。全体として各仮説は概ね支持されたが、自尊感情の脆弱性と援助要請意図との関連、および専門家への援助要請意図と各要因との関連については、仮説と反する結果が多く示された。以下に、それぞれの結果について考察する。

ソーシャルサポート

家族サポートと友人サポートは、単相関ではともに家族への援助要請意図、友人への援助要請意図と有意な相関を示した。しかし共分散構造分析では、家族サポートは家族への援助要請意図に対してのみ、友人サポートは友人への援助要請意図に対してのみ、正の影響を示した。また、専門家への援助要請意図に負の影響を示したのは友人サポートのみであった。以上から、

Table 3 本研究で設定された仮説とその検討結果

仮説	関連する変数	仮説の内容			検討結果		
		家族	友人	専門家	家族	友人	専門家
仮説 1	家族サポート	+		-	○	○	×
仮説 2	友人サポート		+	-	○	○	○
仮説 3	自尊感情の脆弱性	-	-	-	×	×	×
仮説 4	自尊感情				○	○	×
仮説 5	抑うつ	-	-	-	○	○	×
仮説 6	悩み	+	+	+	○	○	○

仮説の内容 + 正の影響, - 負の影響, 空欄 影響なし

検討結果 ○ 仮説を支持, × 仮説を不支持

仮説1は概ね支持され、仮説2も支持された。このように、ソーシャルサポートの存在は、それぞれの資源に対する援助要請意図を高めることが確認された。

また、友人サポートの不足は専門家への援助要請意図をわずかながら高めていた。同世代との親密性が発達課題となり、友人からのサポートが他の資源と比べて最も高い(e.g., 嶋, 1992) 大学生の時期においては、援助要請できる友人が少ない状況は、専門家への援助要請につながりやすい可能性が考えられる。

自尊感情の脆弱性および自尊感情

自尊感情の脆弱性が、いずれの援助要請意図に対しても影響を示さなかったことから、仮説3は支持されなかった。近年の研究においては、援助要請によるポジティブな結果予期が援助要請を促進する一方、ネガティブな結果予期は援助要請に大きく影響はしないことが報告されている(永井・新井, 2007; Shaffer, Vogel, & Wei, 2006; Vogel et al., 2005)。そのため、援助要請によって生じる自尊感情への傷つきといったネガティブな影響も同様に、実際は援助要請にほとんど影響しないという可能性が考えられる。

一方で、自尊感情は、専門家への援助要請意図に対して仮説と反して正のパスを示した。そのため、仮説4は部分的に支持されなかった。では、なぜこのような結果が示されたのであろうか。この正の影響は、これまでの研究ならば、脆弱性仮説を支持する結果として扱われるものである。しかし本研究では、自尊感情の脆弱性という変数を自尊感情とは別に設定しているため、脆弱性仮説による説明が適切とは考えにくい。

今回示されたような関連は、むしろ自尊感情の別の側面を反映している可能性がある。例えば自尊感情の構成要素に、自己効力感が挙げられることがある(成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)。そして、この自己効力感が高い者は、問題や課題の状況においても効果的な行動の遂行が可能となる(Bandura, 1977)。そのため、自己効力感が高いことで、大きな問題を抱えた際に、専門家への援助要請を建設的に選択することが可能になるという可能性が考えられる。しかしながら、このような説明可能性があるとはいえ、本研究の結果からは、自尊感情と専門家への援助要請意図との関連のメカニズムを結論づけることはできない。そのため、自尊感情をめぐる問題については、今後さらに検討を加える必要がある。

しかし、少なくとも自尊感情への脅威という側面から援助要請を検討する場合、自尊感情と援助要請との単純な関連を検討するだけでは十分でないと考えられ

る。そのため、援助要請と自尊感情との関連に関する従来の議論を扱う場合、より詳細な手続きに基づく研究を行う必要があると考えられる。

抑うつと悩み

単相関の分析では、家族および友人への援助要請意図と悩みとの相関を除いては、有意ながらも非常に低い値が示された。しかし共分散構造分析では、専門家への援助要請意図と抑うつとの間を除く全てに予測を支持する影響が見られ、仮説5と仮説6は概ね支持された。これは、抑うつと悩みが同時にモデルに投入されることによって、両変数が本来援助要請に対して持つ、固有の影響が示されたものと考えられる。従って、悩みは援助要請を促進し、抑うつに伴う無気力や問題対処意思の低下は、援助要請を抑制するという従来の主張(Garland & Zigler, 1994)は支持されたといえる。

しかしながら抑うつは、専門家への援助要請意図には影響を示さず、友人に対する援助要請意図に対する影響もわずかなものであった。本研究では、問題の深刻さ、症状の内、ニーズの側面として悩みを、問題対処意思の低下の側面として抑うつを扱った。しかしながら抑うつは、問題対処意思の低下を伴うとはいえ、同時により深刻なニーズでもある。そのため、問題の深刻さによって、専門家に対する援助資源としての認知がより高まり、援助要請抑制の効果を相殺した可能性がある。この点については、今後抑うつをさらに心的苦痛の側面と、無気力、絶望感などの側面とに区別した上で検討する必要があると考えられる。

性差

t 検定の結果、家族および友人への援助要請意図はともに女性の方が高く、性別をダミー変数とした相関分析でも、同様の関連が示された。しかし、共分散構造分析においては、性別は友人への援助要請意図に対して直接の影響を示さず、家族への援助要請意図に対する影響も非常に弱いものであった。これは、性別のもたらす援助要請への影響が、援助要請につながる各変数によって媒介されたためと考えられる。このことから、わが国の大学生の場合、単に女性であることが援助要請を直接高めている訳ではなく、援助要請に影響する各変数の性差が、援助要請における性差をもたしている可能性がある。

しかしながら専門家に対しては、女性であることはむしろ援助要請の低さに影響していた。標準化パス係数の値そのものは、家族への援助要請意図に対する影響同様非常に弱いものであったが、これは、従来の研究結果と異なるものである。男性の方が専門家への援

助が高いことを報告した数少ない例として、アメリカの十代の子どもに対する研究がある (Wintre, Hicks, McVey, & Fox, 1988)。この研究での性差は、女性が思春期から成人期へ向かうに従って、限られたインフォーマルな仲間と、より親密な関係を形成していく過程の反映であると考察されている。しかしながらこの点について、実証的な検討は行われておらず、十分な説明力を持つものではない。また、そもそもわが国での大学生における専門家への援助要請は、これまでほとんど性差が検討されていない。そのためこの点については、今後さらなる検討が必要である。

本研究の限界、今後の研究への示唆

以上のように、自尊感情と援助要請との関連、および専門家への援助要請意図については、仮説と反する結果が多く示され、先行研究から導き出される理論では説明が十分に可能でない部分も多い。特に専門家への援助要請は、家族や友人など、インフォーマルな対象への援助要請との間で、関連する要因が異なるだけでなく、 R^2 も非常に低い値を示した。専門家への援助要請には、特有の規定因が存在する (Rothi & Leavey, 2006) とはいえ、インフォーマルな対象への援助要請との間にこのような大きな違いが見られたことは興味深い点である。今後の研究においては、援助要請の対象も考慮し、対象によるメカニズムの差異も検討しながら研究を行う必要がある。また本研究は、一時点での調査であるため、因果関係については断定できない。今後、縦断的な調査も実施し、因果関係についても同様に検討する必要がある。

このように、本研究は更なる検討の余地を多く残している。しかしながら本研究の結果は、援助要請に関連する4領域における主要な要因を包括的に扱い、各要因の階層関係を考慮した上で明らかにされたという点で意義があると言えよう。こうした結果からは、単に援助要請と各要因との個別の関連だけに注目するのではなく、それら相互の関連も考慮することの必要性が示唆される。今後、援助要請に関する理論の整理、発展を目指す上でも、こうした知見を踏まえ、より詳細な検討を行ってゆく必要があると考えられる。

最後に、今後の援助要請研究における課題について述べる。本研究では、知見の整理という観点から、主に理論上重要とされる変数を選択した。しかしこのことは、これらの変数が現実場面の援助要請生起においても、最も重要な役割を果たすことを意味する訳ではない。例えば、パーソナリティ変数としては、外向性や内的作業モデルなどが、個人の問題の深刻さ、症状

としては、不安や対人恐怖などが、援助要請において重要となる可能性も十分に考えられる。従って、現実場面での援助要請生起に重要な変数は何かという点は、今後も検討すべき課題である。また、従来の援助要請研究においては、発達の視点が含まれた研究が少ないという問題がある。しかし例えば、成人期における愛着の研究では、愛着のタイプがストレス時のサポート希求行動に影響する (e.g., Collins & Feeney, 2000; Mikulincer, Florian, & Weller, 1993; Simpson, Rholes, & Nelligan, 1992) ことが明らかになっており、本研究で示された家族サポートと援助要請との関連は、こうした視点からも理解できる可能性がある。中学生や大学生など様々な発達段階での援助要請が検討されている現在において、今後こうした発達の視点からも、研究を行ってゆく必要があると考えられる。

引用文献

- Addis, M. E., & Mahalik, J. R. (2003). Men, masculinity, and the contexts of help-seeking. *American Psychologist*, 58, 5-14.
- Allgood-Merten, B., Lewinsohn, P. M., & Hops, H. (1990). Sex differences and adolescent depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 99, 55-63.
- 東 清和・岩崎容子・小林 恵 (2001). 自尊感情 (self-esteem) に関する性差研究の動向 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 12, 1-15.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Bosmajian, C. P., & Mattson, R. E. (1980). A controlled study of variables related to counseling center use. *Journal of Counseling Psychology*, 27, 510-519.
- Bramel, D. (1968). Dissonance, expectation, and the self. In R. P. Abelson, E. Aronson, W. J. McGuire, T. M. Newcomb, M. J. Rosenberg, & P. H. Tannenbaum (Eds.), *Theories of cognitive consistency : A sourcebook* (pp. 355-365). New York : Rand-McNally.
- Collins, N. L., & Feeney, B. C. (2000). A safe haven : An attachment theory perspective on support seeking and caregiving in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 1053-1073.

- Cramer, K. M. (1999). Psychological antecedents to help-seeking behavior : A reanalysis using path modeling structures. *Journal of Counseling Psychology*, **46**, 381-387.
- Crocker, J., & Knight, K. M. (2005). Contingencies of self-worth. *Current Directions in Psychological Science*, **14**, 200-203.
- Crocker, J., Luhtanen, R. K., Cooper, M. L., & Bouvrette, A. (2003). Contingencies of self-worth in college students : Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 894-908.
- Deane, F. P., Wilson, C. J., & Ciarrochi, J. (2001). Suicidal ideation and help-negation : Not just hopelessness or prior help. *Journal of Clinical Psychology*, **57**, 901-914.
- Fisher, J. D., Nadler, A., & Whitcher-Alanga, S. (1982). Recipient reactions to aid. *Psychological Bulletin*, **91**, 27-54.
- Galambos, N. L., Leadbeater, B. J., & Barker, E. T. (2004). Gender differences in and risk factors for depression in adolescence : A 4-year longitudinal study. *International Journal of Behavioral Development*, **28**, 16-25.
- Garland, A. F., & Zigler, E. F. (1994). Psychological correlates of help-seeking attitudes among children and adolescents. *American Journal of Orthopsychiatry*, **64**, 586-593.
- Good, G. E., Dell, D. M., & Mintz, L. B. (1989). Male role and gender role conflict : Relations to help seeking in men. *Journal of Counseling Psychology*, **36**, 295-300.
- Goodman, S. H., Sewell, D. R., & Jampol, R. C. (1984). On going to the counselor : Contributions of life stress and social supports to the decision to seek psychological counseling. *Journal of Counseling Psychology*, **31**, 306-313.
- Halgin, R. P., Weaver, D. D., Edell, W. S., & Spencer, P. G. (1987). Relation of depression and help-seeking history to attitudes toward seeking professional psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, **34**, 177-185.
- 平井 元 (2001). 大学生の悩みの構造と、相談相手、学生相談への援助ニーズに関する研究—早稲田大学学生を対象としたニーズ調査の結果より— 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊 **9-1**, 21-31.
- Hoffman, M. A., Ushpiz, V., & Levy-Shiff, R. (1988). Social support and self-esteem in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **17**, 307-316.
- 伊藤武樹 (1993). 悩みとその対処行動が中学生の健康レベルに及ぼす影響 学校保健研究, **35**, 413-424. (Ito, T. (1993). The influence of worries and coping behaviors on the level of health of junior high school students. *Japanese Journal of School Health*, **35**, 413-424.)
- James, W. (1892). *Psychology : Briefer course*. New York : Holt. (ジェームズ, W. 今田 寛 (訳) (1992). 心理学 (上) 岩波文庫)
- Kelly, A. E., & Achter, J. A. (1995). Self-concealment and attitudes toward counseling in university students. *Journal of Counseling Psychology*, **42**, 40-46.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 1013-1023.
- 木村真人・水野治久 (2004). 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点を当てて— カウンセリング研究, **37**, 260-269. (Kimura, M., & Mizuno, H. (2004). Relationships between help-seeking preferences of college students and related psychological variables : A focus on student counseling, friends, and families. *Japanese Journal of Counseling Science*, **37**, 260-269.)
- Komiya, N., Good, G. E., & Sherrod, N. B. (2000). Emotional openness as a predictor of college students' attitudes toward seeking psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, **47**, 138-143.
- Krause, N. (1987). Life stress, social support, and self-esteem, in an elderly population. *Psychology and Aging*, **2**, 349-356.
- Lewinsohn, P. M., Hoberman, H. M., & Rosenbaum, M. (1988). A prospective study of risk factors for unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **97**, 251-264.
- Lewinsohn, P. M., Roberts, R. E., Seeley, J. R.,

- Rohde, P., Gotlib, I. H., & Hops, H. (1994). Adolescent psychopathology : II. Psychosocial risk factors for depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **103**, 302-315.
- Mahalik, J. R., Good, G. E., & Englar-Carlson, M. (2003). Masculinity scripts, presenting concerns, and help seeking : Implications for practice and training. *Professional Psychology : Research and Practice*, **34**, 123-131.
- 松田信樹 (2006). 自尊感情の脆弱性一尺度作成の試み— 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 57.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Weller, R. (1993). Attachment styles, coping strategies, and post-traumatic psychological distress : The impact of the Gulf war in Israel. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 817-826.
- 水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性,被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, **47**, 530-539. (Mizuno, H., & Ishikuma, T. (1999). Help-seeking preferences and help-seeking behaviors : An overview of studies. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 530-539.)
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 (2006). 中学生を取り巻くヘルパーに対する被援助志向性に関する研究—学校心理学の視点から— カウンセリング研究, **39**, 17-27. (Mizuno, H., Ishikuma, T., & Tamura, S. (2006). Help-seeking preferences of junior high school students in Japan. *Japanese Journal of Counseling Science*, **39**, 17-27.)
- Nadler, A., & Fisher, J. D. (1986). The role of threat to self-esteem and perceived control in recipient reactions to aid : Theory development and empirical validation. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 19 (pp. 81-123). New York : Academic Press.
- 永井 智・新井邦二郎 (2007). 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, **55**, 197-207. (Nagai, S., & Arai, K. (2007). Expectation of cost and benefit, and consulting with peers : Junior high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **55**, 197-207.)
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る— 教育心理学研究, **43**, 306-314. (Narita, K., Shimonaka, Y., Nakazato, K., Kawai, C., Sato, S., & Osada, Y. (1995). A Japanese version of the Generalized Self-efficacy Scale : Scale utility from the life-span perspective. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **43**, 306-314.)
- Nolen-Hoeksema, S. (1990). *Sex differences in depression*. Stanford, CA : Stanford University Press.
- Radloff, I. S. (1977). The CES-D scale : A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, **1**, 385-401.
- Rickwood, D., Deane, F. P., Wilson, C. J., & Ciarrochi, J. (2005). Young people's help-seeking for mental health problems. *Australian e-Journal for the Advancement of Mental Health*, **4**(3) <<http://www.auseinet.com/journal/vol4iss3suppl/rickwood.pdf>> (December 1, 2008)
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- Rothi, D. M., & Leavey, G. (2006). Mental health help-seeking and young people : A review. *Pastoral Care in Education*, **24**(3), 4-13.
- Schonert-Reich, K. A., & Muller, J. R. (1996). Correlates of help-seeking in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **25**, 705-731.
- Shaffer, P. A., Vogel, D. L., & Wei, M. (2006). The mediating roles of anticipated risks, anticipated benefits, and attitudes and the decision to seek professional help : An attachment perspective. *Journal of Counseling Psychology*, **53**, 442-452.
- Sheffield, J. K., Fiorenza, E., & Sofronoff, K. (2004). Adolescents' willingness to seek psychological help : Promoting and preventing factors. *Journal of Youth and Adolescence*, **33**, 495-507.
- 嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, **7**, 45-53. (Shima, N. (1992). The effects of social support on daily life stress in students. *Japanese Journal of Social Psychology*, **7**, 45-53.)
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新

- しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, **27**, 717-723.
- Simonsen, G., Blazina, C., & Watkins, C. E., Jr. (2000). Gender role conflict and psychological well-being among gay men. *Journal of Counseling Psychology*, **47**, 85-89.
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Nelligan, J. S. (1992). Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 434-446.
- Sun, R. C. F., & Hui, E. K. P. (2007). Psychological factors contributing to adolescent suicidal ideation. *Journal of Youth and Adolescence*, **36**, 775-786.
- 高木 修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, **29**, 1-21. (Takagi, O. (1997). The process of helping behavior: A proposal of new model. *Bulletin of the Faculty of Sociology, Kansai University*, **29**, 1-21.)
- Tessler, R. C., & Schwartz, S. H. (1972). Help seeking, self-esteem, and achievement motivation: An attributional analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **21**, 318-326.
- Vogel, D. L., & Wei, M. (2005). Adult attachment and help-seeking intent: The mediating roles of psychological distress and perceived social support. *Journal of Counseling Psychology*, **52**, 347-357.
- Vogel, D. L., & Wester, S. R. (2003). To seek help or not to seek help: The risks of self-disclosure. *Journal of Counseling Psychology*, **50**, 351-361.
- Vogel, D. L., Wester, S. R., Wei, M., & Boysen, G. A. (2005). The role of outcome expectations and attitudes on decisions to seek professional help. *Journal of Counseling Psychology*, **52**, 459-470.
- Wintre, M. G., Hicks, R., McVey, G., & Fox, J. (1988). Age and sex differences in choice of consultant for various types of problems. *Child Development*, **59**, 1046-1055.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68. (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamana, Y. (1982). The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **30**, 64-68.)
- (2008.11.6 受稿, '09.9.17 受理)

Determinants of the Help-Seeking Intentions of University Students : Relations Among Main Factors

SATORU NAGAI (FACULTY OF PSYCHOLOGY, RISSHO UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2010, 58, 46-56

The purpose of the present study was to investigate the relation between help-seeking intentions and factors that have been considered to be determinants of help-seeking in previous studies, including network variables, personality variables, one's own symptoms or the seriousness of one's problems, and demographic variables. University students ($N=596$) completed a questionnaire. The results of structural equation modeling indicated that (a) the intention to seek help from friends was related to level of concern, depression, and support from friends, (b) the intention to seek help from family members was related to level of concern, depression, support from family members, and gender, and (c) the intention to seek help from professionals was related to level of concern, self-esteem, support from friends, and gender.

Key Words : help-seeking, social support, self-esteem, depression, university students